SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

パネルディスカッション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 憲彦, 松田, 純, 田島, 靖則, 中井, 弘和 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/6708

パネルディスカッション

パネリスト　石川　憲彦
　　松田　純
　　田島　靖則
コーディネーター　中井　弘和

中井――これまでの三人のパネリストのお話は見事に一つのストーリーになっており、その中でいろいろな問題点を提起していただくとともに、共通の一つのメッセージが出されていたと私は考えますが、もう少し個別の問題等にかかわって、それらを確認しながら討論していきたいと思います。

お話を伺っていて、命の問題を考えるときに重要なことは、やはり神・人間・自然の関係性というか、あらゆる命は互いに循環し、関係し合っているということだと思います。そのような関係性が、科学技術が過度に発展することで壊されてしまっている。今後、命を回復するため、あるいは命を重視する時代を創造するために、この関係性をいかに再生していくかということが一つの重要な課題になると私は思いました。

例えば、松田先生のお話に出てきたiPS細胞は、さまざまな科学技術、医療技術、生殖医療技術がある中で、ある意味では非常に理想的な科学技術でもあるように思われます。実は私の近くにもALSなどの難病で苦しんでいる人たちがおり、この科学技術によって彼らが救われる可能性が出てきたということは非常に明るい話題なのですが、一方で、生命にかかわる科学技術にはネガティブな部分もあります。例えば生命を人工的に作ってしまうという可能

性は、本来の命の循環や関係性を離れた、工業化社会の延長線上での話しで問題点も多く含まれると思います。ここでは、新しい技術のポジティブな面をなるべく残しながら、ネガティブな部分をどう社会としてコントロールしていくかということが重要な課題になるかと思いますが、生命倫理的な観点から、この点についてコメントをお願いしたいと思います。

iPS細胞の可能性と危険性

松田――iPS細胞がどこまで成功するかは、まだ分かりません。人に対する臨床試験はまだまったく行われていないため、これからです。ただ、幹細胞研究はどんどん進んでいます。われわれ自身の体の中にはいろいろな幹細胞がありますので、それを患者から取り出してラボで増殖させ、もう一回患者に戻すという臨床試験が行われており、成果も出ています。それは確実に発展していくと予想しています。それによって、これまで助からなかった難病の治癒が期待され、多くの難病者から山中先生に対して、早く研究を進めてほしいと強い要望が来ているそうですから、それは一つの発展として評価し、見守っていく必要があるでしょう。

しかし、先ほど紹介したように、iPS細胞から精子・卵子を作って人を作るというような、これまでの生命の在り方を根本的に変える可能性もあります。こうしたことについては、社会の在り方との関係で、みんなでそれを議論して、どのようにするのかを考えていく必要があります。日本では二〇一〇年五月に、iPS細胞から卵子・精子を作ることを文科省の委員会で議論して、すでに認めています。もちろんそれは、「ヒト胚を作成しない」という条件の下でですが、不妊治療に役立てるといった理由でどんどん進んで行くので、なしくずし的に展開していかないような歯止めが必要です。その辺を、国民のなかでの対話と合意形成によって、どうコントロールしていくのかが課題になってくるでしょう。

中井――ありがとうございます。私は、カトリック教会がこの技術を歓迎したという話を非常に面白いと思いながら聞いていました。田島先生、宗教界の立場から、この点についてコメントをお願いします。

田島――カトリック教会が歓迎したのは、要するに受精卵

を破壊する必要がなくなったからというだけです。ですから、松田先生が発表されたような不妊治療の一種として許されるか、あるいは同一人物から精子と卵を作成して、胚を作成するということは許されるかといったことになると、そこは恐らく全部ノーです。カトリック教会がイエスと言うはずがないと考えます。同性同士が子どもを持つなどということも同様です。何しろローマ・カトリック教会は、つい最近まで避妊すら公式には認めていなかったのですから。

つまり、それだけ自然とは何かという議論が必要になります。自然であるということ、神によって創られた自然の人間としての営み、家族としての原形は、ヨセフとマリアと赤ちゃんのイエスというのが、カトリック教会の聖家族という家族の原形像なのです。それ以外の形の家族像が受容できるかどうかということです。私はプロテスタントの牧師ですが、カトリック教会というのは圧倒的に数が多いし、やはりキリスト教の中では圧倒的な力を持っていますから、その主張は絶対に無視できません。

しかし、例えば同性婚やホモセクシュアルの問題は、実はアメリカの宗教界でもホットな問題になっています。例えば、同性愛を表明した人物を聖職者として登用していいのかどうかは、ルーテル教会の中でも意見が真っ二つに割れています。ローマ・カトリックも当然認めません。ですから、ローマ・カトリックがここで歓迎したのは、あくまでも受精卵を破壊しなくて済むことになるなら大歓迎という、その点だけだと思います。

中井――分かりました。これは、下手をすると誤解されてしまいますね。石川先生はこの問題についてすでにかなり明確に答えを出されていたのではないかと思いますが、補足等がありましたら、お願いいたします。

石川――一〇年前、私はクローンの話を例に、古典的な所有権と結びついていた古い道徳を利用しながら工業神が性を商品化していく経過について話しました。この問題と比べると先ほどの自分の皮膚細胞から性細胞を作っていくという話は、まだ技術的には若干難しいところもあります。しかし技術が切り開かれてから気付かされる生身の人間の問題は、より深刻になると思っています。

一方で、命とはＤＮＡだという極論が現実味を帯びてくるでしょう。これは、生物の身体は生命が生き延びていくための手段にすぎないとして、古くから神秘主義の中に

ずっとあった議論の延長です。三五億年前に生まれてから、二〇億年近くは単細胞だった命が、今のような身体を持つようになったのはＤＮＡの生存戦略の一つにすぎない。つまり、人間の身体はＤＮＡを守る容器にすぎず、本質的に意味があるのは次の生命を作る精子と卵子だけで、それ以外は付属物だ。そういう議論ですが、もう一方では、ノーベル賞を取った利根川さんが一九八〇年代に、こんな風に言っていたと記憶しています。「限りある地球で私たち人類は、生物として永遠に生き残ることはできない。もし人類に未来があるなら組成を変えて生き残るしかない」。私は、これを実体は無意味で、情報にのみ価値を認める社会の教義だと考えます。今日の生物学でいうと、上記のクローンの話は免疫学的自己（個）の問題、利根川さんの話は神経学的自己（全体）の問題として対立概念をなします。しかしこういった問題に対し、ｉＰＳ細胞は今私達が語っている言語のレベルではまったく表現できない事実を突きつけるでしょう。技術的にも今私たちが想像できる発がん性の問題といった内容とは異なる、予測不能の問題が起こってくるでしょう。いつの時代でも人間が先取りして予測できるのは、あらゆる可能性の二割程度だと考えます。つまり八割は、予測不能というのが知性の本質なのですが、問題はその予測不能性の生み出す結果が、新しい言語や価値体系を造り、古くからの議論と異なる議論を持ちこむことです。しかも、新しい神は、もともと、ことの本質を実体ぬきでイメージに変えて吹き飛ばしかねないところがあるので、とても恐ろしい。

技術上の問題を完全にクリアできないうちに提起される倫理には、相当気を付けなければなりません。先ほどの利根川さんの言葉のように、今の私たちの身体性などには意味がなく、人間が作ってきた文化と遺伝情報だけが、邪魔な身体性にも邪魔されず生き延びればいいという考え方は、すでに誤ったイメージとして多くの人々に浸透し始めています。

自然とは何か

中井――どうもありがとうございました。「自然とは何か」という問題が大きく浮かび上がってきたかと思います。松田先生が提言されたのは、自然を守ることはもちろん重要だが、同時に内なる自然、すなわち人間性、あるいは人間の心を守るということも必要になるということをお話しされました。ここで少し自然とは何かについて、簡単に議論

してみたいと思います。

例えば、田島先生は牧師さんですが、「創世記」の初めに「神は人間が自然を支配するように人間を創った」というような記述があります。これには批判もあるかと思いますが、このキリスト教の自然観のようなものにかかわって、コメントをしていただければと思います。

田島――旧約聖書の最初に「創世記」という書物がありますが、そこに書かれている創造物語や創造神話と呼ばれるアダムとイブの物語は、皆さんも聞いたことがあると思います。最初にこの世界が創られて、人間が創られたという物語が書いてあります。その物語では、神のみが非被造物で、それ以外のものはすべて被造物ということなのです。人間も被造物で、それ以外の動物や植物なども被造物で、人間は一応その被造物を取りまとめる役として、その物語の中では登場してきます。それは何という日本語の訳を付けるかによって違ってきますが、元はヘブライ語で、今の聖書では「支配せよ」と書いてあるのです。つまり、他の生物を支配する。この「支配せよ」が工業化と結び付いて、自然の大規模な破壊をもたらしたという批判が、やはりキリスト教思想には向けられるようになりました。

しかし、「支配せよ」ではなくて、本当は「管理せよ」、スチュワードシップ（Stewardship）なのではないか。つまり、「みんながうまく生きられるように管理しなさい」と神様から委託されたという物語なのだと読まなくてはいけないところを、「支配せよ」と読んでしまい、だから好きにしていい、要らない動物は絶滅させていい、人間だけが生き延びられるように都合のいいように自然をいじってもいいのだというように、キリスト教の、あるいはユダヤ・キリスト教の創造物語は読み解かれてきてしまった。それは反省すべき点だし、本当はそのように読むべきではなかったのではないかということが、環境問題などの中で新しい読み解き方として提唱されています。つまり、「みんなが生きられるようにしなさい」と神様に言われたのに、実は人間だけが生き延びられるようにしてしまったという反省が起こっているということです。

中井――私もそこのところはすごく気になって、繰り返し読んで真の意味を理解しようとしてきたのですが、ある専門家の意見によると、もともとのヘブライ語では「支配せよ」という言葉は、「他の生物と共生しなさい」という意味らしいのです。それが「支配せよ」という言葉になって、英語

の聖書でもだいたいそのような言葉が使われています。ただ、少数ですが、「治める」という語が充てられている聖書もあります。治めるなら分かります。正しく人間が治める、あるいはケアするという意味につながるかと思います。そのように解釈していただければ私としては大変ありがたいと思います。

この点について、石川先生でも松田先生でも結構ですが、少し補足をお願いできますか。

松田――今、田島先生がご紹介されたとおりですが、中井先生がおっしゃった「創世記」の一節は、このようになっています。「地の上を這う生き物をすべて支配せよ」（創世記1・26－28）。「地の上を這う」というのは蛇などのような小動物であって、生物全般ではないです。これについて、いろいろな解釈があります。ヨーロッパの思想家の中でも、リン・ホワイト（Lynn White）などが「人類は環境破壊の元凶だ」と言った（『機械と神』）のに対して、今、田島先生にご紹介されたスチュワードシップ、いわばマンションの管理人というような考え方があります。「人類はこの地上の管理人なので、うまく共生するようにきちんと管理していきなさい」というのが聖書の一節の意味だという解釈が、現代の神学の中で言われています。

ヨーロッパの倫理学では、自然に対する考え方が日本とは違います。日本人は割合「自然の理（ことわり）」にそって、自然と和して行くという感じになるのですが、ヨーロッパ人は自然に対する「人間の責任」を強調します。つまり、自然を徹底的に管理するという立場から発想します。環境倫理においても動物倫理においても、ヨーロッパでは責任を果たすという観点から進むという面があります。例えばドイツ連邦共和国は、二〇〇二年にドイツの憲法（基本法二〇条a）の中に、「将来の世代に対する責任から」「生活の自然基盤と動物の保護」を国家目標として書き込むに至りました。具体的な例をあげれば、EUでは二〇〇九年三月から、動物実験を行って作った化粧品は販売できなくなりました。化粧品の材料になる開発途中の物質の毒性を見るために、ウサギの目にそれを入れて試験し、最後にウサギを安楽死させるということがなされていますが、そのような実験を経て製品化された化粧品はヨーロッパでは販売できないところまできています。このあたりに、人間が自然に対してどのように責任を果たしていくのかという態度の点で日欧の差が出てきます。

中井――聖書的、あるいはキリスト教的に言うと、神の人間に対する最大の掟は「互いに愛しなさい、隣人を愛しなさい」ということだと私は理解しています。その場合の隣人とは何かということが、また問題になるかと思うのです。私自身はこの隣人の中に、人間だけではない土や自然といったものも含めて考えたい。どちらかというと、エコロジカルに聖書を理解したいという思いがあるのですが、石川先生はずっと、循環する関係性の中でこそ命は育っていくのだと言っておられます。この点について一言お願いします。

石川――私も含め、人間はしょせん自分で生まれてきたわけではありません。与えられてきた生命は、実体としてより本来無力なことを自覚して、より大きな他者との関係性の文脈で理解されるべきだと思うのです。人間は二億年かけて生きてきた哺乳類の一つです。哺乳類は恐竜が生きていた時代には非常に弱い動物でした。その哺乳類の中でさえ、人間はどちらかというと弱い存在です。その弱い人間が生き延びられたのは、いろいろなものが食べられて、群れで世界中へ移動していったからだと私は思うのです。その過程で、人間は足の速い動物ではないから、元々は大型動物などは襲えなかったのに、常に集団であきらめずに追いかけ続け獲物が取れるような集団行動を獲得した。ともに希望を持って忍耐強く進むことで、ようやく生き延びてきたのだと思います。とはいえ食べる相手のほうが強いのですから、そこには恐れと畏れが残ります。アニミズムは、人が本来弱いからこそ得られた恵みを、自然への感謝と崇拝という関係性において表現した宗教だと思います。

先ほどザビエルの話をしましたが、一神教の場合も同じでしょう。アッラーには、基本的に生きとし生けるものに宿るさまざまな神々が含まれていると思います。日本ではカトリックもプロテスタントも、北ヨーロッパの思想で議論されますが、私がいたマルタなど南では、神々の代わりに聖人がたくさんいて人々はそこへ拝みに行きます。ですから、カトリックが強固な一神教だとは私は思っていません。元々一神教の神の言葉は、われわれにとって絶対に理解できない、神の側でしか決定できない言葉としてあるわけで、そこでも本来的な人間の無力さに立ち戻り与えられた生命を関係性の中でどう位置づけて言語化するのかが再度問われます。

自然との関係は、自然的生き物である人間自身との関係性にも反映します。私達は障害者など弱者を時代社会の価値観だけで見て、生きる価値がないと考えがちです。代表

的なのは脳死の問題で、二人の人間が生きているのに、片方を生きていないと見なします。しかし、実は脳死判定の後、生き延びていく人は相当多くいます。さらに、脳死判定後に脳のいろいろな機能が再生しだすことも知られているのです。そうすると、脳死による臓器移植という工業技術は、生死を判定しているのではなく、生きるに価値ある人間と駄目な人間の差異を宗教によって正当化することで成立することになります。私は新しい神は、様々な関係性の位置づけを、今後ますますおかしくしていくと思うのです。

私たちは人間ですから、まずあらゆる人間がともに生き合えることを大切にする。しかし同時に、生命を食さないと生きられない中で、生きとし生けるものを、どのように大切にしていくのかも、考えなければならない。先ほどの「創世記」の箇所は、ノアの箱舟の話に至って、神様は再び清くない生き物も生かすという文脈につながります。さらに、預言者イザヤ（Isaiah）の書では「オオカミは子羊とともに宿り、ヒョウは子ヤギとともに伏す。子牛は若獅子とともに育ち、小さい子どもがそれらを導く」「乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子はマムシの巣に手を入れる」と表現します。そのような関係性が、イスラム教にも、キリスト教にも、ユダヤ教にも、聖書の中でアッラーの神話として生き延びていると思います。

科学論・技術論から見た自然観では感じ取れない生命の不思議

中井――今の自然とは何かというお話のベースにある重要な問題として、技術論あるいは科学論があると思います。今の技術や科学が、自然を機械仕掛けで理解するものだということは確かだと思います。ですから、脳死の話が出ましたが、例えば脳以外の臓器が破壊されたとき、そこに誰かの臓器を持ってくれば人は生きられる。それが一つの技術の基本的な考え方であるかと思いますが、命というのは必ずしも機械仕掛けではない固有な働きをすると私は思うのです。例えば、目の見えない人、耳の聞こえない人は、本当に見（観）えないのか、本当に聞（聴）けないのか。恐らくそうではないでしょう。ヘレン・ケラーの話は非常に有名ですが、例えば目の見えない辻井伸行さんというピアニストは非常に絵画が好きで、絵画鑑賞をして、「この絵画が好きだ」などと言うそうです。それが一つの生命の不思議さ、命の不思議さだと私は思います。この技術論・科学論について、先ほどからの続きになるかもしれませんが、何か追加のコメントをいただければと思います。

松田――一〇年前のシンポジウムは「科学と宗教」というテーマでしたので、そのなかで、科学は宗教の反対のように思うかもしれないけれど、科学が発展していくと宗教的な直感が再評価されてくるのではないかということを申しました。その予想は今、私にとって確信にまで深まったという感じです。現在、科学の目が細胞、遺伝子、さらにDNAという分子レベル、生命の最小単位にまで達してきました。そのことによって、かえって生命（いのち）の最大級のつながりが見えてきた、そういう時代に私たちは生きています。

一個の細胞は「ミクロコスモス」と言われる小宇宙です。そのなかに地上における生命進化の歴史が凝集しているという見方を科学者はします。「ミクロコスモスとマクロコスモス（大宇宙）との一体性」と表現されます。例えば、私たちの生命活動を支えている基本要素であるアミノ酸や、あるいは生きていく上で不可欠な水は、地球誕生間もないころに、宇宙から飛んできたと言われています。ですから、私たちがいま生きているということは、四五億年の地球の歴史、それから一三七億年の宇宙の歴史と切り離せない形になっているわけです。現代の生命諸科学は、アトミズム（原子論、要素主義）を徹底していった先に、非常にエコロジカルな壮大なつながりにぶつかっていると思います。それは、日本のアニミズム的な発想と必ずしも矛盾しません。一木一草の中に神が宿ると言われます。御神木というのがありますが、それを拝むことは、眼前の一本の樹だけを拝んでいるとは限りません。樹は独立してそこにあるわけではなく、太陽の光や地中の水などによって生命を支えられています。ですから、同時に、宇宙の生命エネルギーを崇めていることになります。「一木一草の中に宇宙の真理が宿る」と言い換えてよいでしょう。

現在の日本の科学者もさまざまな表現でこのことを語っています。物理学者の佐治晴夫さんはこう言っています。人間は星のかけらが集まってできている。すべては、ひとつのもの〔ビッグバン〕から始まり、すべては互いに関わりあっている（『からだは星からできている』春秋社、二〇〇七）と。彼は現代宇宙論を、神道的な自然崇拝の延長線上で捉えようとしています。

分子生物学者の福岡伸一さんは、ルドルフ・シェーンハイマー（Rudolf Schoenheimer, 1898-1941）の『生体の動態』（一九四二年）の理論を紹介しつつ、こう言います。いのちは物質代謝の一つの流れにほかならない。無数の分子はた

えず動き回り、いつも流れのなかにある。そこここに「淀み」が生じ、そこにつかの間、ある秩序が生じる。その秩序が生命だ。それゆえ、われわれのからだはなんら実体ではなく、流れのなかのある種の淀みにすぎず、ただ一つの大いなる流れの一部なのだ（『もう牛を食べても安心か』文春新書、二〇〇四）、と。生命のこうした捉え方は、仏教的な存在論にも通じます。

難病に罹患する前は生命科学者であった柳澤桂子さんは、多くの著作のなかで、個別の生命と宇宙との一体感について書いています。柳澤桂子は『般若心経』を現代日本語に訳す際、仏教の根本思想を科学的な言葉に置き換えました（『生きて死ぬ智慧』小学館、二〇〇四）。

私たちは　広大な宇宙のなかに　存在します
宇宙では　形という固定したものはありません
実体がないのです
宇宙は粒子に満ちています
粒子は自由に動き回って　形を変えて　おたがいの関係の安定したところで静止します
お聞きなさい
形のあるもの　いいかえれば物質的存在を　私たちは現象としてとらえているのですが　現象というものは時々刻々変化するものであって　変化しない実体というものはありません〔色即是空〕
実体がないからこそ　形をつくれるのです

このように非常に科学的な言葉で、この色即是空、空即是色ということを語っています。今、科学はそのような地点に来ているのではないかという印象を持っています。

宗教と科学の関係性について

中井――一〇年前に科学と宗教をめぐって、松田先生と田島先生が議論をされましたが、田島先生、宗教と科学の関係性について一言お願いします。

田島――会話の糸口があるのかないのかというところで、いつも止まってしまうのですが、今日はカトリックの方に申し訳ないことばかり言ったので、カトリックの方を評価することを一つ言いたいと思います。フランス人のイエズス会士で、ピエール・テイヤール・ド・シャルダンという人がいます。この人は二〇世紀初めの人で、非常に先進的

な考えを持っていました。北京原人の研究をやっていたイエズス会の修道士なのですが、キリスト教的進化論という文明の発展の指針があり、それを見極めながら私たちは進んでいくべきだと言われたのです。私たちは今、どこに進んでいったらいいかということを見失っている状態で、前に進んでいるのだと思います。

ですから、ここからは幼稚園の園長としてですが、子どもたちにはどのような社会を作っていこうとか、私たちはどのようにして生きていこうというビジョンを示さないと、ただ育てて社会の中に放り込み、あとは自分で生きなさいということで、これから先、本当に良い社会が作られるのか。ただ単に、昔よく進化論が批判されたときの弱肉強食や優勝劣敗が自然の法則だというようになってしまったら、行き着く先は本当に真っ暗です。子どもたちが大きくなってほしくないと思うような社会になってしまう。子どもたちを喜んで送り出せるような社会にするためには、やはり私たち大人がビジョンを示すべきだと考えます。

細胞の不思議な営み

中井――ここで技術論に戻りたいのですが、例えば脳の細胞が破壊されても、他の細胞でそれを補うという不思議な命の営みがあるだろうと思うのですが、その技術のありようについて、一言石川先生にコメントしていただきたいと思います。

石川――脳死は死なのかという問題と結びついてくるのですが、一〇歳までの子どもは大人と違って、言葉を扱う脳の領域が破壊されても、再び話せるようになるということは昔から知られていました。これは、機能が未成熟な段階では脳の別の部分が破壊された言語機能を司ってまた働きだすためだと考えられてきました。脳細胞は再生しないと考えられていたからですが、近年脳細胞の再生も起こると言われています。このように技術が進むと新しい事実によって新たな説明も登場するのですが、それ以前の問題として、言葉によってしか科学技術は語れないという科学技術の前提を再考する必要があると思います。

コンピューター言語であろうが、記号であろうが、表現をもつ言葉はすべて、脳の限界をこえたところで、まず人間の精神性が生み出した現象だということです。言葉が先に精神を造ったのではないのです。科学言語も、例外ではありません。科学は、公理の上にしか成立しない世界です。

公理以外のことは、公理を認めさえすればすべて証明可能ですが、公理そのものやそれを形成する言語の問題については手がつけられません。科学用語といえども、客観的中立性を保有してなどおらず、私たちが語る言葉に方向性を与えるムラ気な精神に最後は規定されているのです。聖書に戻れば、「創世記」の中井先生が引用された天地創造神話の前に、もう一つ別の言葉による天地創造の話があります。神の想像（イメージ）した言葉が世界の実体を造るというものです。脳の構造上の論争としてニワトリとタマゴの議論になりかねないのですが、「脳は宇宙より大きいか」と問い掛けると、宇宙を考える脳の方が宇宙より大きいとなるのです。

つまり、科学技術とは本質的に、マインドコントロールの産物なのです。そしてそこに技術の予測不能性の最大の根拠があります。神ならぬ人間のイメージでは、言語が実体化したときに初めて次の言語が生まれてくるので、次の言語の持つ問題まで古い言語では規定できないのです。

中井――どうもありがとうございました。本当はもう少しこちらで議論したいのですが、最初のお約束どおり、会場の皆さまから、ご質問、ご意見、ご感想をお願いしたいと思います。

フロア――何か深くて、深くて、非常に感動して、何も質問がないです。

中井――言葉にならないほど感動して、というご感想うれしいですね。それでは、そろそろ終わりの方に向かいましょうか。お一人ずつに、最後のまとめの言葉をいただきたいと思います。

まとめ

松田――今日は、西洋と日本の比較の話があまり出ませんでした。石川先生のお話の中ではちらちらと出てきていて、その辺が議論になるかなとも思っていたのですが、やはりヨーロッパとはかなり違いますね。ヨーロッパにおいては、人間というのは非常に特別な存在です。神が創った被造物の中で人間だけは別格なのですが、日本の場合はそのような差がありません。日本では命がかなりフラットで、人間が死ねば牛や馬に生まれ変わるという考え方さえあるほどです。人間と神、人間と動植物は差がないということで、

加藤清正の神社もありますし、明治天皇を祭った明治神宮もあります。

最後に、面白い写真をお見せします。図1は高野山の奥の院にある動物実験の供養塔です。人間の墓のすぐ隣に動物の墓が並んでいます。さすが高野山という感じです。

もっと面白いのは、しろありの供養塔です（図2）。これは、日本しろあり対策協会という財団法人が建立したものです。天文学的な数のしろありを絶滅させている会社の業界団体が、「しろあり、やすらかにねむれ」と願っています。シロアリのご冥福をお祈りしていると思うのですが、「しろありよ、安らかに眠って、われわれに悪さ・祟（たた）りをしないでほしい」という意味でもあるでしょう。日本で最も神聖な場所の一つである高野山の奥の院では、このように、人間の墓と動物の墓が隣合わせに立っています。こうした生命観と、ヨーロッパのキリスト教の生命観はかなり違うので、その辺のこともやはり頭に置いて考えていく必要があると思います。

図1　動物実験の供養塔

図2　しろありの供養塔

田島――最後に大きな課題を突きつけられた感じがします。西洋の神というか、ユダヤ教、キリスト教、あるいはイスラム教も、一神教だと言われています。先ほど石川先生も言われたとおり、アッラーという呼び方もあります。しかし、ヘブライ語の旧約聖書の中では、実は複数形で神が出てくるのです。それを一神教の宗教では、神聖なものを表すために複数形で出ているのだという言語学上の解釈をしています。しかし、もしかしたら別の解釈もできるかもしれません。

それから、キリスト教の神はクリスマスで生まれるイエス・キリストと父なる神と聖霊の三位一体ということを言うのですが、これも厳密に言えば一神論の中には収まりません。つまり、三つで一つ、一つが三つという考えで、「一神教はやはり融通が利かない」と言われるけれど、本当は

もっと豊かなものがこの一神教の中にはあるはずだと私は考えていて、それに気付いていないだけなのかもしれないと思っています。

今、大田区宗教者懇話会というグループが東京の大田区にあります。このグループでは、キリスト教、仏教の僧侶、新宗教の方たちがみんなで頭を寄せ合って、池上本門寺で環境問題や慈悲の問題などいろいろなことを話し合ったりするのです。宗教の垣根を越えて、そのような形で話し合いを持つというようなチャンネルも最近はあります。私もプロテスタントの代表の一人として、それに出ています。宗教者もこのままただ黙って社会の片隅で、昔からあるからというだけの理由で存在し続けるというのでは駄目だと思っているのです。それがどのように科学技術の現場などに切り込んでいくことができるのかはまだはっきりしないので、宗教者たちも話し合いを持つところでとどまっていますが、きっとこれから出番があるのではないかと私は考えています。

中井――私も、これからこそ宗教の出番があると思います。

石川――私がマルタで驚いたのは、三位一体の父子聖霊はすっ飛んで、最後はマリア様（たまにイエス様）という形で、言葉が出てくる点です。ですから、私は確かに形而上的には、西洋と日本は大変な違いがあるように思うのですが、一人の人間がとことん打ち砕かれて、「私は無力で何もできない」と感じたときには、皆同じだと思うのです。それがアッラーであるか、誰であるかということではなくて、自然の前に大いに打ち砕かれて心が開かれたり許されたりすることも含めて、全て同じように思うのです。

裸の人間はわらをもすがる思いで、素直に大いなるものを見る。着物を着て欲を持てば洗脳されるのかもしれません。生き物として、哺乳類としての人間は、群れを作る以上、誰かを頭とあがめたわけです。その頭がナショナリズムによる国家なのか、近所付き合いにおける偉い人なのか、あこがれの人なのか、時代は神々と着物を人々に与え続けます。しかし、打ち砕かれて自分一人では動けないときに、私は一体どのようなものを受け入れるか。

私は、このような場ではつい上から目線で考えてしまうのですが、幸いなことに、診察室にいるとほとんど患者さんに圧倒されて、人を治すというよりは、その人たちのたどってきた人生や出会っているものに、ただただ心打ちひしがれてしまいます。とりわけ命を絶とうとしている人の

打ち砕かれ方の素直さの先に出会うと、一緒に大いなるものを感じる以外に何もできなくなります。その時は、マリア様と言うときも、日本の神社で手を合わせるときも、科学技術に頼ってなお生きられると思っている姿から離れて、何もできない弱さからしか歩めないことを覚えます。

今日、子どもたちが人間だけが作った人為的世界だけで生きるようになったために、多くの子どもが服を着て裸の自然を拒否するという現象が起こっています。小さいところでは、虫を怖がるということから始まって、あらゆる自然なるものが怖い。人為的な中でしか安心して生きられない。しかし、こういう子どもたちも本当に打ち砕かれて生きようと思ったところから変化し始めます。松田先生の話にありましたが、自然とは私の内にもあるものなのです。いくら着物を着て人為社会に逃げ込んでも、自分から出るうんちも怖い、精液も怖い、人間が出すものすべてが怖い。体臭を消してお化粧をしたり、人工的な香りで武装していなければ、人間臭くて怖い。そのように、人為的な世界に生きれば生きるほど、私たちは私の中にもあり外にもある自然を恐れだしている。今、この恐れが非常に広がっている気がします。

自然恐怖は、文明恐怖への第一歩でもあるのです。その時代に、私たちが老人としてできることがあるとすれば、自分が生きてきた人生の中で、うまくいった生き方を子どもに示すのではなくて、心砕かれ、どうにもならない一人の弱い人間として、もう一度大いなるものに心を開き、そこにある自然や、そこから啓示されているもっと大いなるものに心を開くための自己修行でしょう。最初に言いましたように、子ども達は石器時代に戻っても生き直せます。希望は、人間だけの社会ではないところに目を開いていくところから始まるのではないかと思います。

中井——どうもありがとうございました。私も非常に感動して、今日の三人の議論で心が揺れて、言葉がうまく出てきません。ですから、今日の議論をまとめることは控えさせていただきたいと思いますが、一言だけお話しして終わらせていただきます。

最後のコメントで石川先生が子どもの話をされましたが、私はこの年になって初めて孫が生まれました。孫を愛するというのは生物学的なあるいは本能的な感情かと思うのですが、子どもの話になると、やはり非常に反応してしまいます。そこで、五〇周年のときに石川先生が話された子どもについてのお話が、ふっと今思い浮かびました。それは、

はいはいをする子どもがまっしぐらに前を向いてはっていく。しかし、ふと不安になって後ろを振り返る。後ろに母親がいれば安心をして、また前に進む。このときの母親と赤ん坊の関係というのは、あるいは人間と大いなる力、これを神と言ってもいいかもしれませんが、その関係に似ているのではないか。私たちが前に進むときに、ふと不安になって振り返って、もし大いなるものをそこに感じることができれば、私たちはまた安心して未来に向かうことができる。そのような話を思い出しました。

今日、三人のお話に共通するところは、大いなる力ということです。これが神であるか、大自然であるかは別にして、そのようなものと人間はつながって生きていくしかないのではないかということが、一つ共通のメッセージとしてあったと思います。もう一つ印象的なのは、これも石川先生のお言葉だったと思いますが、工業化社会で関係性や循環性が断絶された状態になって、それぞれの人・命が孤立感に陥っています。それを元に戻す方法は幾つかあるかと思いますが、例えば生と死の問題についても、安楽でない、苦しみというものがもちろんあるわけです。極度に苦しい生もあるし、死もある。その他者の安楽でない生と死を引き受け合うことによって、新しい命の道が開かれてくるのではないかというお話だったかと思います。私はそのように今も感じています。

私はずっと、今日の中心の話題であった生命倫理の原理とは何なのだろうということを考えていました。それは、次の世代の命に責任を持つということに尽きるのではないかと思います。江戸時代に多く発生した飢饉の中で、特に享保、天明、天保年間に生じたものを三大飢饉と言っていますが、そのひとつ享保の大飢饉では、一〇〇万人が餓死しました。当時の人口が約三〇〇〇万といいますから、大変な大飢饉だったことが分かります。これは主に西日本を中心にして起こった珍しい飢饉なのです。それにかかわって、こんな話が残されています。

現在の四国（愛媛県）の伊予に作兵衛さんというお百姓さんがいたのですが、大飢饉によって奥さんや子どもが次々に亡くなっていきます。その時、作兵衛さんは麦の種を一斗（二〇～三〇キログラム）持っていたのです。周りの人は「それを食べて、何とか生き延びたらいいのではないか」と言うのですが、彼は頑として受け付けず、「自分の命は麦の命に比べると軽い」と言いながら、その一斗の麦の袋を枕にして餓死したというのです。その麦の種は秋にまかれて、多くの麦が生産され、多くの村人たちが救われたとい

う話です。

これは、次の世代の命に責任を持つという生命倫理の一つの形ではないかと思います。私たちは作兵衛さんのようには必ずしもなれないかもしれませんが、人の苦痛、安楽でない死や生を引き受け合う志は、これから持って生きなければいけないのではないかということを、今日は強く感じました。どうぞ良きクリスマスを、そして良き新年をお迎えくださいますようお祈りして、このシンポジウムは終わりにしたいと思います。今日は本当にありがとうございました。